



**ZOOM
UP**

世界スポーツ×地域国際化

～スポーツを通じた国際化は新たな時代へ～

本年9月から11月にかけて、日本国内で初めてラグビーワールドカップ2019が開催され、日本は史上初のベスト8進出を達成するなど大盛況のうちに幕を閉じた。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催もいよいよ目前に迫り、さらに2021年にはワールドマスターズゲームズ2021関西の開催が予定されている。

大規模な国際スポーツ大会が連続して開催されるこの3年間は「ゴールデン・スポーツイヤーズ」と称される。スポーツを通じた地域の国際化は大きな飛躍の契機を迎え、「ホストタウン」の取り組みは大会終了後の交流を見据えた継続的なものへと発展し、加えて、スポーツを観光資源として捉えた「スポーツツーリズム」に力を注ぎ、訪日外国人観光客の注目を集める地方自治体も登場した。

今月号の特集では、「ホストタウン」をきっかけとして積極的な国際交流を行う地方自治体のみならず「スポーツツーリズム」の好影響およびそれに力を入れる団体の先進事例と併せて、スポーツ国際交流員（SEA）の活用についても紹介する。「ゴールデン・スポーツイヤーズ」という新しい時代の中で、スポーツを通じた地域国際化をさらに加速させるための一助となれば幸いである。

〔(一財)自治体国際化協会総務部企画調査課〕

1

地域資源を活用したスポーツツーリズムのすすめ

(一財)日本スポーツツーリズム推進機構 会長 原田 宗彦 (早稲田大学教授)

スポーツで人が動く

スポーツツーリズムとは、「スポーツで人を動かす仕組みづくり」のことである。分かりやすい例が、ラグビーワールドカップ2019大会である。自国の応援のために、世界各国からおおよそ50万人の富裕層ファンが訪れ、宿泊、交通、レジャーに多くのお金を使う。試合と試合の間が長い間、ファンは会場から会場へ移動する途中、各地で観光消費を行い、全体で4,000億円を超える経済効果があると期待されている。この場合、ラグビーワールドカップというスポーツイベントが、人が動く「理由」となっている。

スポーツで人が動く理由を作るのは、旅行者を受け入れる都市や地域の仕事である。マラソンやトライアスロ

ンといったスポーツイベントの開催や、スポーツ合宿の受入れのための環境整備、そして地域を自転車で巡るガイド付きツアーといったアクティビティの造成など、持てる都市資源と自然資源を最大活用することで、どのような都市・地域もスポーツ観光地になることが可能である。



羽田空港に掲げられた航空会社の応援バナー

「観戦型」や「参加型」、 さまざまな形のスポーツツーリズム

スポーツツーリズムには、「観戦型」もあれば「参加型」もある。ラグビーワールドカップやオリンピック・パラリンピックは、観戦型スポーツツーリズムの典型で、海外から多くのファンを呼び込む磁力を持つが、これらのビッグイベントを継続して開催することはできない。その一方、参加型スポーツツーリズムは、マラソンイベントのように持続性があり、多くの都市や地域で継続して開催することが可能である。

参加型スポーツツーリズムの形態は多様である。一般的なスポーツツーリズムは、スポーツ大会やスポーツ合宿、そしてさまざまなアクティビティ（リバーラフティングやスキー・スノーボード）への参加が中心であるが、もう少しマイルドな参加形態もある。それが「アクティブツーリズム」である。旅行先で自転車を借りて名所旧跡を訪ねることや、観光地をウォーキングで巡るなど、身体活動をともなったアクティブな観光のことを意味する。また、健康のためのトレッキングや森林浴、そして健康志向の食事や温泉などを組み合わせたヘルスツーリ



多くの観客を集める国際的スポーツイベント
（横浜アリーナで行われた2018年バレー世界選手権）



地域活性化を担うスポーツイベント
（兵庫県佐用町「いなちくロングライド」）

ズムもこの部類に入る。その一方、通常のスポーツツーリズムよりも関与の度合いが高い「アクションツーリズム」や「アドベンチャーツーリズム」といった領域もある。前者は、速さや高さ、危険さや華麗さなどの過激な要素を持ったリスクを含んだスポーツで、マウンテンバイクで山道を駆け下りるなど、若い人に人気がある。後者は、遠く離れた大自然の中で、冒険的なアウトドアアクティビティに挑戦する旅行で、シーカヤックで海岸線の景色を楽しむ活動などが含まれる。

スタジアム、アリーナ、プール等、スポーツ施設は有限であるが、海、山、川、道路、雪など、スポーツ環境・資源は無限であり、あらゆる場所・地域が活用可能である。また神社仏閣など、緩やかな磁力が観光客を引き付ける有形の文化資産は有限であるが、相撲、柔道、空手、流鏝馬など、無形の文化資産は無限である。場所と環境を選ばないスポーツツーリズムは、外国人にも人気が高く、インバウンド促進と地域国際化にとって必須の地方創生アイテムである。



リバーラフティングを体験する筆者と鈴木スポーツ庁長官
（右から1人目と3人目）

ジャマイカとの交流の歩み

カリブ海の陽気な国ジャマイカと、山陰に位置する人口最少県の鳥取県とのつながりを不思議に思う人は少なくない。

きっかけは2007年世界陸上選手権大阪大会。陸上大国ジャマイカが誇るウサイン・ボルト選手やアサファ・パウエル選手ら53人が、鳥取市にある布勢総合運動公園陸上競技場で事前キャンプを行い、公開練習や陸上教室などで県民と交流したことがはじまりだ。

2015年同選手権北京大会でも、パウエル選手や女子短距離の女王シェリーアン・フレイザープライス選手ら79人が同競技場で事前キャンプを行い、2日間の公開練習には県内外から1万2,500人が詰めかけた。この大会で、ジャマイカチームは金メダル7、銀メダル2、銅メダル3、合計12のメダルを獲得し、「過去最多のメダルを獲得できたのは鳥取でのキャンプのおかげ」とジャマイカ関係者から高い評価を得た。



2015年事前キャンプ 壮行会

2015年事前キャンプを契機に、ジャマイカとの交流が本格化。2016年1月には鳥取県がジャマイカのホストタウンに登録され、同年3月にはジャマイカのウェストモアランド県と鳥取県が姉妹提携を締結、5月にはジャマイカ陸上競技連盟と鳥取陸上競技協会が友好団体提携を締結し、スポーツ、青少年、文化などの幅広い分野で交流を推進している。

こうした交流の積み重ねが実を結び、2017年11月、鳥取県は2020年ジャマイカ代表選手団事前キャンプ実施に関する包括協定をジャマイカオリンピック協会、パラリンピック協会と締結し、2020年事前キャンプでは東京オリンピック・パラリンピック競技大会に出場する全競技のジャマイカ代表選手を受け入れることが決定した。



ジャマイカコーチによる陸上セミナー

子どもたちの世界を広げる

ジャマイカとの交流で特に力を入れているのが青少年交流だ。小中高生を対象にしたジャマイカ陸上セミナーでは、毎回多くの子どもたちがジャマイカコーチから世界レベルの技術を学ぼうと目を輝かせて参加している。また、日本グランプリシリーズ鳥取大会「布勢スプリン



応援の書をもらい布勢スプリントで優勝したマイリー選手



桐生選手と競ったことはジャマイカ高校生選手にとって貴重な経験になった（布勢スプリント）

ト」にジャマイカの高校生が2017年から出場し、桐生祥秀選手やケンブリッジ飛鳥選手、福島千里選手などの日本トップ選手と競い合い、2018年大会ではジャマイカのオキーラ・マイリー選手が市川春菜選手と同着1位という輝かしい成績を収め、会場を大いに沸かせた。

布勢スプリントでは競技のみならず、ジャマイカの高校生が県内の高校を訪問し、書道体験や相撲稽古の見学、陸上部との合同練習を行うなど、交流する場を大切にしている。鳥取県の高校生が国際感覚を養えるだけでなく、ジャマイカの高校生にとっても日本文化に触れる貴重な機会であり、「2020年事前キャンプで必ず鳥取に戻ってくる」と決意を新たにする姿は頼もしい限りだ。

鳥取県の高校生も2017年から毎年ジャマイカを訪問



高校相撲の名門、鳥取城北高校相撲部との交流

し、現地の高校の文化祭で書道パフォーマンスを披露したり、日本大使公邸で開催されたレセプションでダンスを披露した際は、ジャマイカオリンピック協会や陸上競技連盟の会長などから喝采を浴びた。また、鳥取県立鳥取湖陵高校の高校生は、日本の唐揚げとジャマイカ料理「ジャークチキン」をコラボさせた「Jam-Jap Chicken」を考案して現地の高校生と料理した。この経験を生かして、JGAP（Japan Good Agricultural Practice）認証を取得した自慢のトマトを使ったおもてなし料理を2020年事前キャンプに向けて開発中だ。



ジャマイカの高校生と「Jam-Jap Chicken」を一緒に料理

Together for 2020 and beyond!

いよいよ来年、ジャマイカのオリンピック・パラリンピック代表選手が鳥取県に集結する。昨年、鳥取県の高校生が在ジャマイカ日本大使公邸を訪問した際、山崎大使から「鳥取県はジャマイカにとって日本へのゲートウェイであり、鳥取県の高校生は日本の文化大使である」との嬉しいお言葉を頂戴した。

2020年事前キャンプでは、鳥取県の多くの子どもたちが参加し、「おもてなし大使」として活躍できる場をぜひつくりたい。ジャマイカ選手と交流し相手の文化を知ることは、国際理解を深めるだけでなく、日本文化や自身のアイデンティティを再認識し、郷土への誇りを持つことにつながる。また、ジャマイカのパラリンピアンとの交流は、障がいを知り、ともに生きる社会の実現への一歩となるだろう。

事前キャンプを契機に鳥取県の子どもたちの世界と可能性が大いに花開き、2020年のレガシーになることを心から願っている。

共生社会ホストタウンへの登録

青森県三沢市では、日本でオリンピック・パラリンピックが開催される貴重な機会を、市民に実感していただきたいとの考えのもと、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京2020大会）のレガシーとして、共生社会・ユニバーサルタウン三沢を実現するための取り組みを実施してきた。

三沢市は、これまで、太平洋無着陸横断飛行を縁に、米国ワシントン州ウェナッチ市・東ウェナッチ市と姉妹都市交流を行っている。また、米軍三沢基地を有し、国際交流が盛んに行われている地域であることから、英語圏の国・地域におけるパラリンピック競技の事前キャンプ誘致を進めてきた。

そうした中、東京2020大会出場を目指す車いすラグビーカナダ代表チーム（カナダチーム）から、練習施設である国際交流スポーツセンターおよび宿泊施設である国際交流教育センターとともに、共生社会を目指す三沢市の取り組みについて高い評価を受け、カナダチームの事前キャンプ地に決定し、2017年12月に、カナダを相手国とするホストタウン・共生社会ホストタウンに登録されたところである。



カナダチームと日本チームのエキシビジョンマッチ

カナダチームとの交流

事前キャンプの際、カナダチームはすべての練習を公開し、また、日本チームとのエキシビジョンマッチを行

うなど、市民にパラリンピックや車いすラグビーについて知ってもらい、興味を持ってもらえるような活動を実施している。

また三沢市では、市内の小中学校を訪問する交流事業を、キャンプごとに実施している。児童・生徒との交流事業には、すべての選手・スタッフが参加し、車いすラグビーについての説明や競技体験だけではなく、授業や給食時間の中で、お互いの日頃の生活などについてコミュニケーションを取ることで、国際交流・異文化交流が図られるとともに、バリアフリーやユニバーサルデザインについての理解が深まる機会になっている。



小中学校での競技体験を通じた交流

この他にも、事前キャンプを支えてくれているたくさんの市民ボランティアの方々に、カナダチームからのお返しとして、カナダの朝食として有名な、パンケーキがふるまわれるなど、さまざまな機会でも市民との交流が行われている。



高校生に向けた講演の様子

共生社会の実現に向けた ソフト・ハード両面の取り組み

こうした事業は、カナダチームの事前キャンプの際に実施しているものであるが、冒頭でも触れたように、三沢市は、東京2020大会のレガシーとして共生社会を実現させるため、以前から、ソフトとハードの両面において、さまざまな取り組みを行っている。

ソフト面においては、小中学校にオリンピック・パラリンピアンなどを派遣する体験型授業のトップアスリート派遣事業や障がい当事者講師による心のバリアフリーなどについて学ぶユニバーサルマナー教室を実施しているほか、民間企業と連携した心のバリアフリー絵画コンクール、スポーツ義足体験授業、パラスポーツ体験イベント、ユニバーサルマナー検定などを開催している。



ユニバーサルマナー教室の実施風景

また、改修を控える公共施設におけるバリアフリー調査のほか、民間の店舗におけるバリアフリーのための改修工事や物品購入について補助金を交付するなど、ハード面における整備も進めている。



バリアフリーを意識したハード面整備

三沢市がこうした取り組みを推進しているのは、2020年までではなく、その先を見据え、共生社会・ユニバーサルタウン三沢を実現するためである。カナダチームの



館内案内はわかりやすく図解で表記

事前キャンプを受け入れ、市民との交流事業を実施することは、三沢市の特色である国際色豊かな街に加え、誰もが暮らしやすい共生社会を大きく進展させる貴重な機会となる。

ユニバーサルタウン三沢の実現を目指して

2019年8月、三沢市は、先導的・先進的なユニバーサルデザインの街づくりと心のバリアフリーに取り組む自治体として、「先導的共生社会ホストタウン」に認定された。

また、カナダチームからは、市民ボランティアの献身的なサポートやボランティアをはじめとする市民との交流、そして三沢市が取り組むソフト・ハード両面の施策などのすべてを含め、ここでしかない取り組みとして、「三沢モデル」と評価いただいている。

年齢、性別、障がいの有無、国籍等に関わらず、誰もが暮らしやすい共生社会を実現するために、国際交流が盛んな地域だからこそ描ける展望（もしくは道筋）があると考えている。

今後も、地域の特性や東京2020大会、カナダチームとの交流という貴重な機会を最大限に生かし、ユニバーサルタウン三沢の実現を目指していきたい。



選手と交流を深める子どもたち

これまでの中国との交流

長野県は、中国河北省と1983年に友好提携協定を締結し、以降30年以上にわたり、長野県日中友好協会等と連携した官民一体の友好関係を築いてきた。

長野県阿部知事と河北省の許勤（きよ・きん）省長は、1年おきに互いの国を訪問し、インバウンド、青少年交流など相互交流の推進を確認するなど、密接な関係を築いてきている。

こうした交流に対して、唐家璇（とう・かせん）中国日本友好協会会長から、「日中友好交流のイノベーション」と評価をいただき、また、昨年2018年には「対中友好都市交流協力賞」（中国人民対外友好協会）を受賞したところである。



河北省長との会談（2019年8月）

ホストタウン

長野県は、1998年に冬季オリンピック・パラリンピック競技大会を開催している。当時、地域の小中学校が、オリンピック競技大会に参加する国・地域を応援する「一校一國運動」を実施したが、これが東京オリンピック・パラリンピック競技大会の「ホストタウン」の原型であり、長野県は、都道府県としては唯一、中国を相手国としたホストタウンとして登録している。

長野県は、2020年東京オリンピック・パラリンピッ

ク競技大会に向けて、中国のホストタウンとして大会を盛り上げる事業を実施するほか、競技選手の長野県での事前合宿を誘致するなど、中国との交流関係を一層深めていく。

北京オリンピック・パラリンピックを契機とした交流強化

県では、中国河北省との友好提携、および、北京市と2017年に締結した、「冬季オリンピックに向けた青少年の冬季スポーツ交流のための覚書」に基づき、スポーツを中心とした中国との青少年交流、県内ジュニア選手の育成を行い、未来を担う日中の子どもたちの新たな交流に取り組むこととなった。

こうして始まったのが、「北京冬季オリンピック・パラリンピック交流強化事業」である。



河北省・長野県ジュニア選手合同練習

(1) 事業概要

長野県ジュニア選手の競技力と国際経験の向上、および長野県のスキーブランドの認知度向上のため、中国河北省・北京市から選抜された冬季スポーツジュニア選手を招へいし、長野県ジュニア選手との合同練習を実施する。また、長野県ジュニア選手を北京・河北省に送り、中国ジュニア選手との合同練習を行うほか、帯同する指導者による中国のスキー指導者へのコーチング指導やスキー場利用者への誘致イベントを行う。

本事業を通じて、オリンピックを目指す青少年の相互交流、競技力向上だけでなく、次世代を担う若者同士の日中友好の絆を深めることにつながる。

(2) 2018 年度実績

2019年1月には、中国河北省スキー・スノーボードハーフパイプジュニア選手10人を約1か月間長野県白馬村にて受け入れ、トレーニングを行ったほか、地元中学校のスキー教室に参加し、英語を交えてスキー技術について意見交換を実施した。

スキー教室での交流では、中国ジュニア選手から、一緒に練習できて良かったという感想を得た。地元中学生も、中国ジュニア選手の技術に驚くなど、お互いに良い刺激となった。

また、同1月に、河北省の競技運営役員を受け入れ、日本選手権クロスカントリー競技大会の視察や、白馬ジャンプ競技施設、白馬村、野沢温泉村の各スキー場視察、意見交換を行った。視察を通して、医療体制やスキー場整備の方法のノウハウ等を説明した。

今後の交流

2017年度に始まった本事業は、2019年度冬の開催で3回目となる。本年度も引き続き北京冬季オリンピック・パラリンピック交流強化事業として、長野県スキージュニア選手を河北省へ派遣し、中国のジュニア選手との合同練習を実施するほか、中国のスキー指導者へのコーチング指導を実施する予定である。また、中国から競技運営役員とボランティアを受け入れ、育成支援をする予定となっている。



2018年度河北省スキー・スノーボードハーフパイプジュニア選手受け入れ 白馬村学生との交流



2018年度河北省スキー・スノーボードハーフパイプジュニア選手受け入れ 歓迎会の様子

今後も、北京オリンピック・パラリンピック交流強化事業やホストタウンでの取り組みを通じて、長野県と中国の青少年が相互交流し、未来の日中友好の懸け橋となるよう県としても支援していく。

今年は2022年北京冬季オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向け、長野冬季オリンピック・パラリンピック競技大会のノウハウを得るため、北京市書記や、中国国家体育総局長等の中国要人が来県し、長野県白馬村のスキー競技施設などを視察した。長野県では、こうした機会もしっかりと捉え、今後の交流強化につなげてまいりたいと考えている。

そして、2022年に向けて「ウィンタースポーツ大国」および「ウィンタースポーツ人口3億人」の2つの目標を掲げている中国に対し、青少年交流を通じた冬季スポーツ交流や、インバウンド等で連携し、将来にわたって続く交流・協力関係構築を目指してまいりたい。



北京市書記来県・白馬村スキー競技施設視察（2019年6月）

Golf in Japan

三重県では、県内に立地する68のゴルフ場を活用し、海外の高所得者層の誘客を図るゴルフツーリズムを推進してきた。

日本は米国、カナダに次いでゴルフ場数の多い国にも関わらず、国内市場向けのPRしか行われてこなかったため、「Golf in Japan」はほとんど知られてこなかったが、数年をかけて海外のゴルフツアー会社の視察旅行（ファムトリップ）の実施や、海外で開催される国際商談会の出展継続を行い、少しずつ「Golf in Japan」に対する認知度を向上させてきた。

そして、昨年10月には日本初となるゴルフツーリズム商談会「IAGTO 第一回日本ゴルフツーリズムコンベンション」を三重県で開催し、観光資源の魅力や美食の数々、日本ならではのホスピタリティ、治安の良さ等への高い評価を通じて、世界のゴルフ旅行地図に日本を登場させることに成功した。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会等スポーツを通じた訪日気運が高まる中、さまざまな国・地域からゴルフと観光を目的に日本を訪れる訪日客は一層増えていくものと期待する。



IAGTO 第一回日本ゴルフツーリズムコンベンション商談会の様子

三重県における「ゴルフツーリズム」

一方で三重県では、一般的なインバウンドではあまり使用しない手法をこのゴルフツーリズムでは用いてきた。



三重県からパタヤへのゴルフツアーの様子

それが、タイ・パタヤに拠点を置く「東海岸ゴルフコース協会」(The East Coast Golf Courses Management Association: EGA) との「ゴルフツーリズムの地域間連携の促進に係る覚書」(MOU) の締結およびそれに基づく交流事業の実施だ。交流の主軸は年一回のゴルフツアーの相互送客で、タイからは毎年100人規模のゴルファーが来日し、4泊5日3ラウンドを楽しんでいく。ゴルフの最終日に三重県民も参加して開催するゴルフコンペがツアーのハイライトになっている。タイ側は、一緒にラウンドするであろう三重県民を想像しながらお土産を用意してきたり、三重県民側も、年一回の国際交流イベントを心待ちにしている。



津カントリーでゴルフを楽しむタイ人たち

一見、「交流」と「インバウンド」は直結しないように思われるかもしれないが、ゴルフツーリズムに関しては確かに効くことを、MOU 締結4年目を迎えて実感している。年一回の大型ゴルフツアーは、1,500万円も



IAGTO 第一回日本ゴルフツーリズムコンベンション交流ゴルフトーナメントの様子

の消費を地域にもたらすほか、メディアに取り上げられやすく、県内において「ゴルフツーリズム」という言葉が市民権を得るきっかけとなったり、タイからのゴルフツアーを受け入れたゴルフ場が新しくインバウンドに取り組み始めたり、フレンドリーコンペに参加した県民ゴルファーが、タイ以外の外国人ゴルファーに対してもホスピタリティたっぷりに接してくれるようになるなど、県全体でゴルフインバウンドを進める基盤の強化に大いに寄与してくれている。

また、双方向の流れがあることにより、海外と日本のゴルフ文化の違いやゴルファーの志向などに気づかされ、次のプロモーションのアイデアになることも少なくない。市場原理ではなく交流関係に基づいて毎年来てくれるパタヤのゴルファーたちは、三重を育てる親心から三重のどこが良くて、どこが悪いかを正直に指摘してくれるた

め、その繰り返しの中で、ゴルフデスティネーションとしての三重の強み・弱みや三重が目指すべきゴルフツーリズムの方向性も鍛えられてきたと思う。

地域の課題や長所を生かした「ゴルフツーリズム」に向けて

三重県も、ファミトリップや商談会展出といった一方通行のプロモーションだけやっていたのであれば、ここまで大きく育たなかったとも思う。もし、これからインバウンドのゴルフツーリズムに取り組もうと思われている地域があれば、ぜひ一緒に走ってくれる海外のゴルフコミュニティを見つけ、交流をスタートさせることから始めてみてほしい。地域ごとに課題や長所は異なるが、皆さんの地域にもきっとふさわしいゴルフツーリズムが見つかる手助けになると信じている。



IAGTO 第一回日本ゴルフツーリズムコンベンション プレファミ (台風の夜)



伊勢神宮の宇治橋前にて

2021年、概ね30歳以上であれば誰でも参加できる世界最大の生涯スポーツの国際総合競技大会が日本・関西に

ワールドマスターズゲームズは、国際マスターズゲームズ協会 (IMGA) が4年ごとに主宰する、生涯スポーツの国際総合競技大会



2017 オークランド大会の様子

である。夏季オリンピック・パラリンピックの翌年に開催し、第1回は1985年にトロント(カナダ)で開催、直近では2017年にオークランド(ニュージーランド)で開催された。

概ね30歳以上のスポーツ愛好者であれば、個人、仲間、家族と一緒になど、誰もが参加でき、年代カテゴリや競技レベルカテゴリごとに競い合う、誰もが世界一をめざすことができる大会である。



いよいよ2020年2月には参加者エントリーを開始する

「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西」は第10回大会として、アジアで初めて開催し、2021年5月14日から5月30日までの17日間、関西広域(福井県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、徳島県、京都市、大阪市、堺市、神戸市の13府県政令市)で35競技・59種目を開催する。目標参加者数は国内から3万人、海外から2万人の計5万人。

競技参加だけでなく、参加者同士の交流や、開催地周辺の観光など、スポーツツーリズムを楽しむ大会である。

ゴールデン・スポーツイヤーズの最終章、「みる」「ささえる」スポーツを「する」スポーツへ

日本において、「する」スポーツは、昨今のマラソンブーム等もあり、スポーツをする機運も徐々に高まりつつあることから、直近のスポーツ庁の調査では、成人の週1回以上のスポーツ実施率は55.1%^(※)となっており、目標とするスポーツ実施率65%に向け、より一層「する」スポーツの機運を高めることが必要である。

(※) 2019年1月スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」より

国際的に見ても、1975年にヨーロッパのスポーツ閣僚会議において、「スポーツ・フォー・オール憲章」が採択され、それまでの一部の才能や機会に恵まれた者だけが行うスポーツから、誰もがスポーツに参加する権利を持つというスポーツの大衆化が始まり、「する」スポーツの歴史はわずか40年余りである。

このような状況の中、日本では2019年から2021年まで、ラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズの国際的なスポーツ競技大会が3年連続同一国で開催される「ゴールデン・スポーツイヤーズ」を迎える。

「みる」「ささえる」スポーツの最高峰の大会を開催する2019年、2020年のスポーツ機運の盛り上がりを受けて、「する」スポーツに取り組む行動変容の1つの鍵となるのが、参加型の国際総合競技大会である「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西」である。本大会を通じてスポーツ実施率の向上やスポーツ産業の発展、スポーツツーリズムを通じた地域活性化の促進などをレガシーとして遺すべく、さまざまな取り組みを進めている。

大会の経済波及効果は1,461億円

過去大会のデータでは、ワールドマスターズゲームズ

の参加者の平均滞在日数は、大会期間約 10 日間に對し、国内参加者 9.4 日、海外参加者 15.8 日となっており、特に海外参加者が大会期間より長く滞在し、開催地を観光などで楽しんでいることがわかる。



参加者はスポーツだけでなく、観光や参加者同士の交流、地元の人との交流を楽しみにしている

前回大会の 2017 オークランド大会で組織委員会が実施したアンケートでは、競技以外に関西大会に期待することは「観光 (79.5%)」、「食 (56.3%)」の順に高いなど、参加者の観光に対する期待、ニーズは高い。組織委員会が算出した大会開催に係る経済波及効果は 1,461 億円、大会後の記念大会の継続やレガシーを見据えて実施される取り組み等がもたらす開催地等の知名度向上による訪日観光客増加・観光消費拡大等の効果を推計した「大会レガシー効果 (期間：2021 年 6 月～2029 年 12 月)」は 1 兆 868 億円としている。

大会オリジナル着地型体験プログラムの充実により、スポーツツーリズムを促進

そのため、アジア、日本で初開催となる本大会では、関西の観光地の情報を提供するだけでなく、参加者が開催地ならではの大会オリジナルの体験プログラムを多数提供する。これらのプログラムは従来のような団体、ツアーなど発地型の旅行形態ではなく、参加者のスケジュールやニーズに合わせて選択できる、例えば修行体験ツアーなど着地型の体験コンテンツとしているため、旅行者が観光の目的とする「思い出づくり」の一助となり、大会参加者の満足度の向上につながる。また、開催地圏内で公共交通機関の周遊が可能となるオリジナル交通パスを提供することで、参加者各々がスポーツとツーリズムを楽しむことができる仕組みとなる。



開催エリアの周遊促進

各プログラムは、組織委員会の大会ホームページでも紹介し、出発前の検討段階で体験プログラムの提案を行うことで、各地域で競技参加以外の過ごし方を具体的にイメージすることができ、滞在時間の拡大につながると見込んでいる。また、これらの体験プログラムは、各地域で造成に取り組んでいるため、各地の地域活性につながり、開催期間中の経済波及効果が期待できる。

大会を契機に、各地域がサステイナブルな観光を構築

各地域がこれを契機と捉え、着地型体験プログラムの造成および磨き上げを行うとともに、海外からの訪日客の受入れ態勢を整えていくことで地域主体のサステイナブルな観光の構築を目指す。本大会は「ゴールデン・スポーツイヤーズ」の締めくくりではあるが、これで完結するのではなく、大阪・関西万博をはじめ、大会終了後もレガシーとして受け継がれるものにしていかなければならない。



大会以降のレガシーを遺すためには、地元が主体となった海外からの訪日客の受入れ態勢を整えることが重要である

SEA とは

SEAは、任用団体のスポーツ関係部署（スポーツ振興部局、教育委員会、高等学校、スポーツトレーニングセンターなど）に配属され、スポーツを通じた国際交流活動に従事する職種です。

任用団体のスポーツ指導事務の補助（スポーツ事業の企画・立案および実施にあたっての協力、助言など）、地域における優秀な選手などに対するスポーツ指導への協力、任用団体の職員や地域住民に対するスポーツ指導への協力、地域の民間国際交流団体のスポーツ事業活動に対する助言、参画などを通して国際交流活動を行います。

なお、2019年7月現在では、全国で13人のSEAが活躍しています。



クロスカントリースキーを指導するSEA（写真中央）



バレーボールを指導するSEA（写真中央）

特定種目のプロフェッショナル

SEAは、母国において国内オリンピック委員会、政府機関などが特定種目の指導者の分野で特に優秀と認めら

れる者として推薦する青年たちであり、任用することで、学校や地域でプロフェッショナルなコーチングを受けることや、海外のスポーツ選手と一緒に競技をすることができます。

国籍	種目
ポーランド	バレーボール
アメリカ	野球
ノルウェー	クロスカントリースキー
インドネシア	バドミントン
フィジー	ラグビー
ブルガリア	新体操
タンザニア	陸上
エチオピア	陸上
ニュージーランド	フィールドホッケー
アメリカ	ボート（スカル）

SEAの国籍及び種目一覧（2019年7月現在）

国民体育大会やオリンピック・パラリンピック競技大会に向けたジュニア選手の育成などに、是非積極的なSEAのご活用を検討願います。

なお、任用スケジュールについては、以下の図のとおりであり、外国語指導助手や国際交流員とは大きく異なりますのでご注意ください。

2019年				2020年			
9月	10月	11月	12月	1月	2月		9月
配置要望調査			配置要望締切			～	勤務開始

2020年度SEA任用スケジュール

質問や不明な点などについては、以下の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】

JET プログラム事業部調整課
電話番号：03-5213-1727

8

SEA という大きな存在

秋田県観光文化スポーツ部スポーツ振興課 荻原 由美子

はじめに

秋田県は、2016年11月にフィジー共和国青年スポーツ省と、スポーツによる国際交流に関する基本協定書を締結した。2017年8月、相互交流の一環として、フィジー出身のジョシュア・ケレビ氏をスポーツ国際交流員(SEA)として招致した。ジョシュア氏は、ラグビーのフィジー20歳以下代表としてプレー後、天理大学に進学し中心選手として活躍したトップ選手であり、その経歴を生かした活動を期待しての招致であった。

SEA の主な業務と今後への期待

①スポーツを通じた国際交流

県の「SEA 派遣事業」に申請した学校を訪問し、講義と実技を織り交ぜながら、フィジーとラグビーを紹介。昨年度の訪問実績は14校であり、延べ1,300人ほどの児童・生徒と交流を図った。子どもたちが実際にラグビー競技を体験しながらの活動は、国際交流の楽しさを強く印象付ける事業となっている。

②競技団体と連携した専門的なラグビーの競技指導

SEAは、ラグビーのトップイーストリーグに属する社会人クラブチーム「秋田ノーザンブレッツ RFC」でチーム全体の技術指導を行っている。

また、全国の強豪校・チームのフォーメーションや戦術の分析とその分析に基づく助言・指導も担っており、秋田県ラグビーの競技力向上に大きく寄与している。

③東京2020オリンピックなどの事前合宿誘致・受入れ

秋田県は秋田市とともに、フィジーを相手国として内閣府の「ホストタウン」登録を受けており、オリンピックを始めとする大会の事前合宿誘致や相互交流を進めている。

今年9月、ラグビーW杯日本大会の事前合宿地として、フィジー代表チームを受け入れた。その際、通訳として、選手のサポート役として、合宿受入れ成功に大きく貢献した。この実績が、今後のオリンピックの事前合宿誘致に大きくプラスになるものと考えている。

SEAの活動も2年目となった。身長190cmという体格同様、今や秋田県のラグビー界にはなくてはならない大きな存在となっている。これまでの活動により得た経験を元に、秋田とフィジーの懸け橋として、さらなる活躍を期待している。



小学校でフィジーの文化について説明する SEA



ラグビー体験を指導する SEA (右から2番目)



訪問先の生徒たちの反応